

せん。保安隊に力を入れ、街中を見回っているのです」と、道々話してくれました。

若い時は、国民学校の校長をされ、「子どもたちがしたことは許して下さい」と謝ってくれました。

そして「ここです。上がりなさい」と言つて、お寺のような立派なお宅の戸を開けてくれました。広い庭の向こう側には、同じような部屋がたくさん並んでいます。中で一番広い部屋の戸を開け「お入りなさい」と言われたその中では、上品なおばあさんが糸を紡いでおられました。

男性は「私の母（オモニ）です。日本語は少しも話せませんが、氣遣いはいいですね」と、そして「あなたは、私を見て、お父さんと言いましたね」と言われました。

「私には子どもが二人いて、亡く

なった姉の子どもが五人います。七人の子どもの女親です」と、終戦から、その日までのことを話し、「私は、この子たちを日本に連れて帰るまでは、死ぬことができません」と言いながら軽いせきをしました。

「どこが悪いのですか」

「胸が悪いのです」と答えました。

「ちよつと待っていてなさい」と言

つて部屋を出ていきました。

戻つて来ると、大きなどんぶりに青汁を一杯入れ「これは、胸の悪い人に効果があるから全部飲みなさい」と言い「今日から、私を父さん（アボジ）と思つて、何でも話さない」とまで言つてくれました。オモニは、私の話をいろいろ聞いてくれました。「アイゴー」と泣き「子ブタよ」と言うのです。私にたくさん子どもがいるのでブタのよう

だ、と言つたと思ひました。

「また、何かあるといけないから」と言つて、わざわざ私の住む長屋まで送つてくれ、お米まで置いて行かれました。

夜、主人に昼間の出来事を話しました。それまで涙など見せたことのない人が男泣きしていました。

四、五日して、またアボジが来ました。家の中を見回しても何もありません。部屋の片隅に小さな火鉢を見つけ「これは使っていないか」と聞くので「炭がなくて、使えません」と答えました。「では、持つてついで来なさい」

私は「オモニが私のことを子ブタと言つてましたが、子どもがたくさんいるからですか」と尋ねてみました。

「可愛いということだよ」と笑つ